

小学校 音楽科 部会

部会長 弁城小学校 校長 永水 正博

実践者 今任小学校 教諭 山口 由一郎

1 研究主題

言語活動の充実を図った音楽科学習指導のあり方
～ 受容・共有・広げる・深めるを意識した切り返しの工夫～

2 主題設定の理由

(1) 今日の課題から

新小学校学習指導要領は、学力の重要な3つの要素として、基礎的、基本的な知識技能の習得 知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力の育成 学習の意欲が明確に示された。

小学校音楽科教育の目的は、音楽の表現及び鑑賞の様々な活動通して得られる豊かな音楽体験を重視して、創造性や協調性、社会性あるいは深い探求心などを育成すると共に、知性と感性の調和の取れた人間を育成すること、そして、抽象性や構構性なども含め、音楽の持つ芸術的な特性を十分に生かして、心豊かな人間の育成に役立てることにある。ここでは、授業で得た音楽経験を学校生活や家庭での生活に生かしながら、児童が自ら音楽を親しみ、生活を明るく潤いのあるものにすることのできる資質や能力を育成しようとしている。

その中で、音楽科が持つ課題については、次の4点を指摘している。

感性を高め、思考・判断し、表現する一連のプロセスを働かせる力、生涯にわたって音楽に親しみ、音楽文化のよさを味わったり、生活や社会に生かしたり豊かにしたりする態度の育成

音楽を表現する技能と鑑賞する能力の育成においては、音や音楽を知覚し感性を働かせて感じ取ることを重視すること。

歌唱の活動に偏る傾向があり、表現の他の分野と鑑賞の学習が十分でない状況が見られるため、創作と鑑賞の充実を図ること

我が国の音楽文化に愛着を持ち、そのよさを感じ取って理解し、他国の文化を尊重する態度などを養うため、長く歌い継がれ親しまれてきた日本のうたや和楽器などの伝統音楽の学習の充実

こうした課題意識のもと、指導内容の連続性・系統性・発展性を十分に考え、児童が音楽活動を楽しみながら様々な音楽に深く理解していくような教育を計画し、進めるようにすることが大切であるといえる。問題点を授業レベルにおとしてシンプルに挙げるとすれば以下の4つになるであろう。

【問題点】

- ・歌唱表現と器楽表現・音楽づくりのバランスがとれていない
- ・表現・鑑賞の関連が図れていない
- ・音や音楽の感受が十分でないまま表現技能の習得を図ろうとしている
- ・とおり一遍の鑑賞学習が行われている

(2) 音楽科における基礎・基本

「基礎・基本」は「基礎的・基本的な内容」を略した用語であり、学習指導要領に示されている目標及び内容の総体である。よって、音楽科における基礎・基本とは、表現や鑑賞の活動において必要となる技能、知識・理解、さらに、子どもたちの学習への興味や関心、意欲や態度、さらに自ら学び自ら考える力など、主体的・創造的に学習を進める上で必要とされる様々な資質・能力など、音楽科で育てたい学力のすべてを指している。

3 主題の意味

(1) 音楽科における「言語活動の充実」とは

音楽的なおもしろさやよさを感じ取ったり、音楽に関する養護や揮毫などを音楽活動と関連づけながら理解したりするときに、心の中で感じ取ったことや想像したことなどを自分の言葉で他に伝えていけるということである。伝えていけることが、お互いの感じ方のちがいを知ることになったり、同じ思いをすることということが認識できたりするきっかけとなる。さらに音楽活動をすすめていく上で、「思いや意図」を持つことができるようになることである。

充実を図るためには、子ども同士の心の中に浮かんだ言葉を受容・共有し、深め・広げていくことが最も重要であると考えられる。

4 研究の目標

子どもたちが互いに、音楽を特徴付ける要素を根拠に、それぞれの曲が持つ曲想を言葉にして説明したり交流したりする場面を仕組み、その時に言葉にしたことを音楽表現を通して感受させることで、音楽科における言語活動の充実を図る。

5 研究仮説

音楽を特徴付けている要素（歌詞、ふし、リズム、調性、和声、音色 作曲者の意図）を根拠に、曲について感じたことを互いに言葉を通して交流し、言葉と音楽表現との関連を図る活動を仕組み、音楽科における言語活動の充実を図ることができるであろう。

6 研究の計画（授業の計画）

(1) 題材「曲想を味わおう」

曲「広い空の下で」、「木星」、「風を切って」

補助「火星」

(2) 題材の目標及び指導計画

題材名	題材の目標
「曲想を味わおう」	想像豊かに聴いたり、思いや意図をもって表現を工夫したりしようとしている。 (関心・意欲・態度) 歌詞や旋律の動きから曲想を感じ取って、気持ちを込めた表現の仕方を工夫している。 (感受・表現の工夫) 旋律や強弱の変化、速度、重なり合う響きなどに気をつけて、各パートの役割にふさわしい表現で歌ったり楽器を演奏したりしている。 (表現の技能) 曲想の変化を感じ取ったり、移り変わっていく響きを味わったりしながら聴くことができる。 (鑑賞)

時	学習活動	関心・意欲 ・態度	音楽的感受の 工夫	表現の技能	鑑賞の能力
1	曲「広い空の下で」の指導用CDを聴いたり、歌詞の内容を読んだりして曲全体の感じをつかむ。 旋律の音の動きや重なり方を感じ取りながら聴く。	曲想や旋律の特徴を感じ取りながら聴くことができる。			歌詞の内容や作曲者の思いや意図を感じ取ることができる。
2	音程やリズムに気をつけて二部合唱する。			自分の歌うパートのリズムや音程に気をつけて歌うことができる。	
3	曲想を生かした表現を工夫して思いをもって二部合唱する。		自分たちの学校生活に重ねて、曲想にあった歌い方を工夫することができる。	自分の歌うパートのリズムや音程、声の出し方に気をつけて歌うことができる。	
4	鑑賞曲「木星」と「火星」を聴き比べ、作曲者の意図を感じ取る。	木星と火星の曲想のちがいに関心をもって聴くことができる。			
5	鑑賞曲「木星」の構成を感じ取ったり、曲想を生かして考えられた、オーケストラの響きの変化を味わう。		主な旋律の反復や変化を感じ取って聴いている。		楽曲を特徴付けている要素と曲全体の構成との関わりを感じ取りオーケストラの演奏のよさを味わって聴いている。
6	合奏曲「風を切つて」の曲全体の感じをつかんで、リコーダーで二つの旋律を演奏する。	楽曲の表す情景や作曲者の意図を考えながら聴くことができる。		リコーダーの2つの旋律を演奏することができる。	
7	それぞれのパートの特徴を聴き取り、合奏をする。			楽器の演奏の仕方や音色に気をつけて自分のパートを演奏することができる。。	
8	パートを一つずつ		音色の組み合わせ		リコーダーだけ

<p>本時 重ね、音の重なり合いを感じながら、思いや意図を持って合奏する。</p>	<p>せや強弱を工夫し、曲想の変化を生かすようにいろいろな演奏の工夫を一人一人が思いや意図をもって行うことができる。</p>	<p>といろいろな楽器での演奏を聴き比べ、曲想の感じ方のちがいを言葉にすることができる。</p>
---	--	--

7 指導の実際（単元計画 第8時）

(1) 主眼 音色の組み合わせや強弱を工夫し、曲想の変化を生かすようにいろいろな演奏の工夫を行うことができる。

(2) 授業仮説

リコーダーの演奏に様々な楽器の音色を重ねたり、いろんなリズムの楽器を一つ一つ加えていくことで、曲想が変化していくことに気づかせることができ、その変化を言語表現させることで、思いや意図をもって演奏の工夫を行うことができるであろう。

(3) 展開

学 習 活 動	支 援 ・ 評 価
<p>1 前時の学習を振り返り、本時の学習のめあてをつかむ。</p> <p>めあて</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>パートを一つずつ重ねて、曲想の変化を聴き取りながら、自分の考える「風を切って」の合奏をしよう。</p> </div> <p>2 一つ一つのパートを重ねたり、Aの部分とBの部分の演奏比較したりして、曲想の変化を感じ取る。</p> <p>一つ一つのパートを重ねる</p> <p>：リコーダー＋ハイハット・木琴 八分音符の連続音が風を切って走る爽快さを表す。</p> <p>：＋小太鼓・大太鼓 力強い感じになる。勢いがでる。</p> <p>：＋鉄琴・キーボードメロディ 曲が持つ情景が広がる。きらきらして綺麗な感じになる。</p> <p>：＋キーボードベース 安定する。全体が支えられた感じになる。</p>	<p>それぞれのパートがどのような音色・旋律・リズムで演奏をしているかお互いに聴き合い、パートの特徴を感じ取る。</p> <p>音色を重ねた時に、どんな感じがしたかたずね、同じように感じた子がいることを確認し、共感させる。</p> <p>感じ方のちがいや言語表現のちがいも認めることができるように、繰り返し演奏しながら、言葉と音楽的感受の関連を図る。</p> <p>音色や旋律による曲想の変化を言語表現できる。</p>

Aの部分とBの部分を演奏比較する。
 A...なめらかに、スピード感がある。
 冒険の始まりのイメージ
 B...音程も高くなり気持ちが高ぶる。
 力強さを感じる。
 鉄琴の動きがとても激しい感じがする。

3 リコーダーだけの演奏と様々な楽器を重ねた演奏を聴き比べ、ちがいを言葉にする。

4 思いをもって、通して演奏をする。

いろいろな音が重なり合ったり、いろいろなリズムが組み合わせると曲想にあった表現ができるな。

拡大楽譜を見て、旋律の動きやリズムの変化に気づかせる。

作曲者の意図で作られたテンポや旋律の動き気づくことができるように、遅いテンポで演奏したり、副旋律を外したりして感じ取らせる。

曲の構成から、曲想の変化を言語表現できる。

曲想に対する考え方をまとめ、それぞれの「風を切って」に対する思いをどのように表現したらいいか発言させ、意図を持って演奏できるようにする。

《評価の観点》

音色の組み合わせや強弱を工夫し、曲想の変化を生かすようにいろいろな演奏の工夫を一人一人が思いや意図をもって行うことができる。

(4) 板書計画

パートを一つずつ重ねて、曲想の変化を聴き取りながら、自分の考える「風を切って」の合奏をしよう。

《それぞれの楽器はどんな感じを表しているかな?》

小太鼓...力強い、風を切って走っている感じがする。

ハイハット・木琴...八分音符の連続音がスピード感を出している。



キーボード・鉄琴...メロディはテーマを表している感じがする。

(二つの旋律) 鉄琴の音は、涼しい感じ。副旋律が強さ・かっこよさを感じる

ベース...曲全体が安定する。しっかり走っている気がする。



主人公の登場

大太鼓...全体のテンポをひっぱっている。

いろいろな音が重なり合んなリズムが組み合わせると曲想にあった表現ができるな。

(5) 本時場面授業分析

導入部：それぞれのパートの特徴を捉える。

この場面では、主旋律と副旋律をリコーダー全体で演奏し、旋律のちがいを感じ取ったり、それぞれのパートを一つずつ分けて演奏し聴き比べた。ここでは、それぞれの特徴を捉えることが目的だったので、言語化は図っていない。分けて演奏することが次の活動の見通しに有効に働いた。「一つ一つのパートを重ねると曲の感じ方は変わるだろうか？」と発問し、学習のめあてをもった。

展開部：一つ一つのパートを重ねたり、Aの部分とBの部分の演奏比較したりして、曲想の変化を感じ取る。 それぞれの楽器がもつ音色と旋律の特徴を味わいながら、曲のどんな雰囲気を作り上げているか言葉にする。 (自分の楽器の役割を認識する 意図を持たせる)

この場面では、大きく2つの言語表現活動を取り入れた。一つは各パートを重ねていき、徐々に音楽の広がりを感じさせること、また、それを言語表現させること。もう一つは曲の構成に着目して、曲の流れの変化を比較検討し、言語表現をさせること。



印象的な八分音符の連続音



ノリがよい8ビートのリズム

一回で曲想の変化を感じ取る子どもたちもいたが、なかなか、感じ取れなかったり、言語表現できない子もいた。そこで、気づきが少ないときには、繰り返しリコーダーのみとの演奏と比較を行った。また、感じ取ることができた児童の発言を共感させたり、「どの楽器のどんなところからそう感じたの？」と発問し、深めたりして、言語表現させていった

【子どもたちの発言】 は切り返して深めた発言

- ・ハイハットや木琴が入ると、スピード感がでてる。
バイクに乗って広いところを走る感じ
- ・木琴の音が曲に合っている。 風をきって走っている感じ



高音が印象的な副旋律



テーマとなる主旋律

【子どもたちの発言】 は切り返して深めた発言

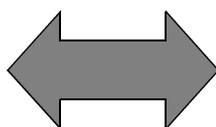
- ・鉄琴の音がきれい。 空を駆け抜けている感じ 星が
- ・違うメロディが入るとさっきより曲に広がりが出る。
- ・キーボードのメロディが入ると、何かが登場した感じがする。 曲の主人公
- ・ベースが入るとどっしりしてきた。 安定してくる。

次に曲の構成による曲想の変化を捉えた。もっとも印象的なのは鉄琴に八分音符の連続音が移ったことである。子どもたちはこの音の動きの特徴を景色の変化ととらえた。また、風が強くなっているなど、状況の変化としてもとらえた。

【子どもたちの発言】 は意図に切り替える発言

- ・最初は出発した感じがする。ウからは何か風が強くなって、ピンチがきたような感じがする。最初は音を弱く、ウから音を強くする。
- ・ウからは、メロディの音の高さが高くなるから、風をきるスピード感が上がった感じがする。ウから少しテンポを上げたい。

まとめ：リコーダーだけの演奏と様々な楽器を重ねた演奏を聴き比べ、ちがいを言葉にする。それぞれがイメージする「風を切って」をそれぞれの楽器がもつ特徴を生かし曲想にあった速度を決め 音の重なり合いのバランスを考えながら合奏をする（意図をもって演奏すること）



展開部で、全体で共有した言葉を一人一人が曲に対する思いを持ち演奏を行った。板書を使って、それぞれのパートが曲のどんな雰囲気を作り出しているかを考えて演奏をしたら、全体で創り上げようという気持ちが生まれてきた（演奏が終わったあとの静けさも感じることができた）。リコーダーとの比較でその特徴を浮きだたせることは非常に有効であった。

【演奏比較後の感想】

リコーダーの時は、一つの音しかないのであまり風を切ってる感じが無いけど、合奏の時は、色々な音がまざっているから、リコーダーの時より音が大きくなっているから、はげしい風がふいているような感じがした。

全部の楽器がいろいろな音で調和をとれていてとても迫力がある。リコーダーよりもぼくは、風をきる。

1リコーダーはスピードがちょっとおそかったけど、合奏はスピードがちょっと速くはかかった。
2リコーダーの時はちょっとさみしい感じだったけど、合奏はさみしい感じがなくなった。

リコーダーは音がきれいでよかったと思うけど、合奏になるとリズム感があってよかったと思う。いんげん汁のこった音は、もっくんがとってもきれいでメロディーがのっていた。(ドラム)もよかったと思います。

8 成果と今後の課題

【成果】

教師側の発問や切り返しによって、子どもたちに感じたことを話させる場を、出来る限り音楽表現を行った瞬間に行うこと。音楽表現と言語表現の距離が近いほうが子どもは音楽の特徴を発言しやすい。

曲想の変化を短いスパンで繰り返し聴かせること。あまり長くなると前の演奏の特徴が消えてしまう。板書で演奏の特徴を言葉として残しておく必要がある。

書く言語表現は学習の終わりがふさわしい。話す言語表現を教師が意図的に広げていけば、十分に共有でき、思いや意図を持って音楽表現することができる。

【課題】

音楽表現に対する言語化はとても抽象的で難しいので、鑑賞の学習などを通してじっくり音やメロディを言葉で表す練習や曲の聴き比べて感じ方のちがいを言葉に表すことが必要不可欠である。

表現に視点を持ってくるとなかなか技能を高める時間をとることが難しくなってくる。技能は曲想を感じる上で最も大切な基礎の部分であるから、学年を通してリコーダー・鍵盤ハーモニカの運指技術を繰り返し訓練したり、リズムうちを音楽の日常化として全体で楽しく取り組んだりする必要がある。

意図をもって表現するには、演奏がある程度完成されてこないとむずかしい。弾くので精一杯の子どもたちも多かった。

参考文献 小学校新学習指導要領ポイントと授業作り「音楽」

編著 金本正武・坪能由紀子